



TITLE:

2)「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔グローバルCOE〕採択：保育・教育実践に貢献しうる研究アプローチの構築--人の生きる場の「あるがまま」に迫る方法論とは--

AUTHOR(S):

山崎, 徳子; 岡田, 敬司; 勝浦, 眞仁; 川上, 大介

---

CITATION:

山崎, 徳子 ...[et al]. 2)「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔グローバルCOE〕採択：保育・教育実践に貢献しうる研究アプローチの構築--人の生きる場の「あるがまま」に迫る方法論とは--. 研究開発コロキウム: 平成19年度 成果報告書 (Colloquium for Educational Research and Development) 2008: 14-15

ISSUE DATE:

2008-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/143091>

RIGHT:

## 保育・教育実践に貢献しうる研究アプローチの構築

一人の生きる場の「あるがまま」に迫る方法論とは―

The study of the method contributing to child care and education

― the method of understanding life as it is

研究代表者 山崎 徳子 (D3)                      教員 岡田 敬司  
研究分担者 勝浦 眞仁 (D2)      川上 大介 (M2)

### 〔研究目的〕

研究を現場の実践につなげる「学」にしたいという研究者の願いを背景に、従来の行動科学の枠組みを超え、現場を人と人が出会い関わる場とし、その営みを内側から捉え、人の「生の質」に迫ろうとする機運の高まりが見られる。保育・教育といった、人の生きるさまざまな現場研究においても、多様なかたちの質的アプローチが試みられるようになってきた。ここには ①いかに観察するか ②いかに記述するか ③いかに理論化するか といった多層な問題が含まれており、現場を生きる中から問いを立ち上げ研究する方法論、および方法的態度の構築が求められている。

この授業では、ボランティア、また研究者としてさまざまな現場で、観察またはインタビューを行った体験から得られた質的データを持ち寄り、人の「生の質」にどれだけ迫れているのか、またそれぞれの分野で得られた知見が、現場でどのような貢献をなしているのか、価値観を交叉させ、領域横断的な検討をし、保育・教育実践に貢献しうる研究アプローチの構築を目指す。

### 〔研究経過〕

授業は毎週木曜日の2限にゼミ形式で行われ、5名の参加者がほぼ2回ずつ事例を発表し、発表者の関心にそって、方法論に関する討議を行った。

教育学部4回生田中佑幸は、小学校のスクールボランティアの立場から、発達障害を抱える子どもへの支援の問題を考察した。従来の療育理論（個体論的アプローチ）が障害を抱える子どもを適応させるためのアプローチであったことを指摘し、それが療育現場での関わりを中心とされることの多い現状に疑問を提示した。それに対し、子どもと「共にあること」の中で、感性的なコミュニケーションを通じ、子どもを主体として尊

重しつつ関わるという関係論的アプローチの重要性を考察した。

人間・環境学研究科 M2 川上大介は、従来のステイタス面接や統計的・客観的方法とは異なる「語り合い」という方法を用いて、青年期のアイデンティティ形成の過程を明らかにしようとしている。多様な協力者との出会いを通じて「生きられる還元」を繰り返し、「私」を支える自明性を明らかにすることで、協力者理解が豊かなものになり、より多くの読者の了解を得られる「私」の個別性を超えた普遍性を持つ理論が生み出されるのではないかとした。

人間・環境学研究科 D2 勝浦眞仁は広汎性発達障害を抱える子どもたちやその子の親、教師と関わっている。現在学校で考えられている「子どもの教育的ニーズ」の限界を提示し、個別具体の事例の中にある「生き生きとした関係」や「その人らしさ」を描き出すことを通して、従来の枠組みでは扱えなかった「固有の知」の創出が、特別支援教育をより実りあるものにしていく可能性を見出した。

人間・環境学研究科 D3 山崎徳子は、障害児学童保育の指導員として企画・運営にあたりながら、実践の記録を記述し、その場面について母親と対話することを通して自閉症児の関係発達の様相を表そうとしている。母親との対話に「表現と理解」という方法的態度を持ち込むことにより、「新しい関係」が「新たな環境」となって創出された。この体験をもとに、実践と研究の往還、研究対象者に何が届くかについて考察した。

教育学研究科 研究生の金井一穂は、保育園での参与観察おける〈観察〉と〈記述〉をめぐる問いから、H.ワロンによる乳幼児期の鏡像理論とJ.ラカンによる鏡像段階論を手がかりに、それぞれの思想家がどのように人間をまなざし、また人間が人間に「成ること」をどのように志向したのかについて研究した。人間形成における「自我」の誕生と「身体」の疎外感について理論的な視点から考察を深めることを試みた。

## 【研究成果】

### 私たちの質的研究—実践との関係から

以上の議論を踏まえ、私たちが考える質的研究の方法と実践の関係に関する気づきを3点あげ、まとめにかえたい。これは方法論を構築するための継続的な課題でもある。

- ・私たちの方法は、現場の人々の多様な生き様に接するなかで、ぜひ伝えたいものに出会うことから始まる。それは「ふと気づかされる」受動的なものである。

- ・私たちの方法の目的は、研究対象者の行動や語りの意味を表層的に解釈することではなく、その豊穡な体験を、出会う者との関係のなかで間主観的に感じられるもの、身体に感じられるものを基に「わかる」ことである。研究対象者を一個の主体として受け止めようとする態度は自分を反省的に捉え直す契機となり、その実践にも示唆を与える。

- ・私たちの方法は研究対象者を間主観的に把握する一方で、事象を全体として俯瞰する客観的な態度を必要とする。読み手の了解可能性に訴え、公共性に関われたものになるためには、事例の中にそれらが「生き生きと」「厚く」記述されなければならない。